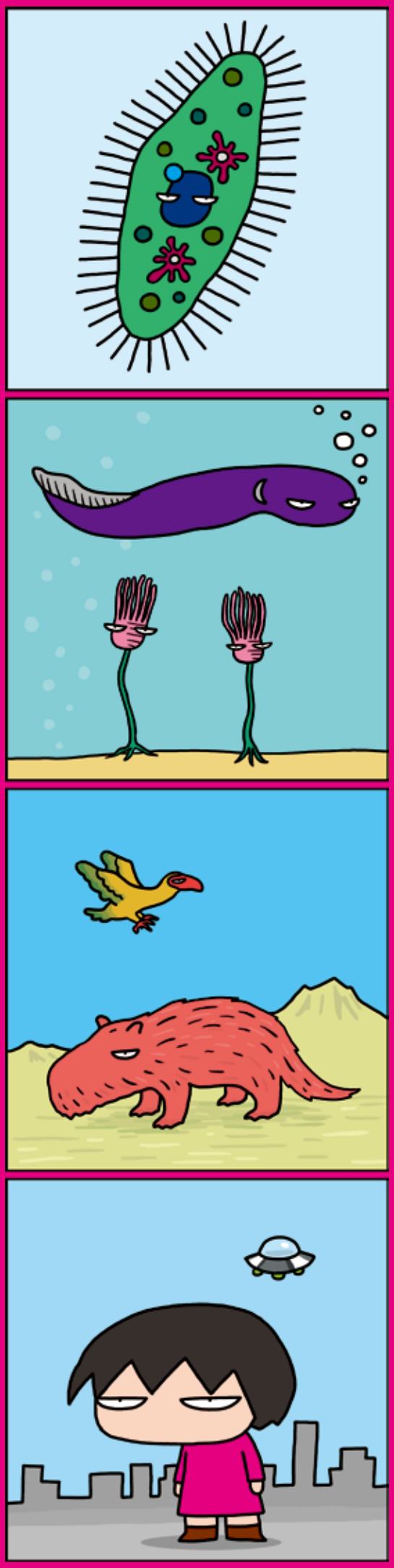


べつやくれい「ゾウリムシからいまに至るまで」

# 女子美

No.163/2008


2P 新入生のみなさんへ
3P 2009年度 新任専任教員紹介
4P 退職教員からのメッセージ
5P イラストレーター べつやく れいさんインタビュー
8P クローズアップ⑤オストリッチーズ
9P 海外スプリング・スクール 報告
10P 女子美スタイル☆最前線 ギャラリートーク
14P 2008年度 卒業（修了）制作展 報告
17P プレファブコートAX贈呈式 他
18P 就職フェア2009 レポート
20P 第9回パリ賞受賞者 保科晶子さんエッセイ 他
21P 女子美アートミュージアム展覧会情報 他
22P 卒業生桑島十和子氏 日本アカデミー賞最優秀美術賞授賞 他


女子美術大学広報誌

# Message

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

## Message ・1 新入生のみなさんへ

学校法人女子美術大学
**理事長　大村　智**
（おおむら さとし）

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。学生時代に個性を確立し歩むべき道を見極め、将来の大いなる飛翔のために備えて頂きたいと思います。

美術・芸術は人々の心に潤いを与え、心豊かな人生を送るために大変重要な役割を担っています。特に、今日のような社会では最も必要とされるものであることは、間違いありません。本校で知識や技術を学び感性を磨くとともに、しっかりした人生観と社会観を持ち、自ら考え、正しい判断を導きだすことができるように、精神の向上を心掛けて頂きたいと願っています。

そこで、学生時代にぜひやっておいて頂きたい3つの事柄を、挙げたいと思います。まず、良い友に恵まれるよう努力をすること。『信は永遠の友を作り、不信は永劫の仇を作る』という言葉がありますが、自身が人から信用される人物になることを心掛けることです。それは、日々の積み重ねによって培われます。2つ目は、良い師に巡り会うことです。卒業後にも何かと相談にのって貰える先生こそ、恩師といえるのです。そのような師からは、人生を送る様々なことを学ぶことができます。そして最後は良書を持つことです。分野を問わず座右の書は、自分の不明や成長に気づき、人生観や社会観を持つ一助となることでしょう。そして、この3つの事柄は散漫な生活をしていては逃してしまい、心して生活をする中で巡り会えるものです。

本校は来年110周年を迎えます。我が国初の女性が美術を学ぶことのできる、歴史と伝統を有する大学です。それまではほとんど男性に贈られていた文化勲章、文化功労者などを片岡球子、大久保婦久子、三岸節子、郷倉和子の先生方が授与され、女性の受章者の大半を女子美術大学卒業生が占めています。また、卒業生の大活躍は美術ばかりでなく、芸能、デザイン分野などへと広がっています。

皆様には無限の可能性が開かれているのです。健康に留意され、充実した日々を送られますよう期待しています。

**学長　佐野　ぬい**
（さの ぬい）

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。個性豊かなみなさんを、新しく女子美へお迎えできまして、とても嬉しいです。キャンパスでお会いするのも楽しみです。

女子美術大学は、今年で創立109年になりました。20世紀のはじめ1900年に、現在の文京区の、本郷弓町に創立されました。この年は、パリのシンボル、「エッフェル塔」が建った年でもあります。

本学の建学の精神は、「芸術による女性の自立」、「女性の社会的地位の向上」、「専門の技術家、美術教師の養成」であります。

この精神を引き継ぎ、その伝統をふまえて、今も学校法人女子美術大学の理念として長く続いています。

女子美の特色は、女子大として、日本ではわが一校だけ、芸術、美術の専門教育を行い、「芸術による女性の自立」をしっかりと打ち出し実行しています。実力を身につけた卒業生たちは、創造力を発揮して、美術家、デザイナー、教育者、研究者となって、社会に進出しています。プロフェッショナルな諸先生方は、貴方たち一人ひとりの資質や特性を伸ばしながら、豊かな人間性を育成します。

美を追求する現代美術は、何もかもが実験です。経験なんです。尊敬する先生や作家、先輩の制作現場でいっしょに制作をしていると、やりたいことが次から次へと出てきます。多彩な好奇心を持って、何でも試してみてください。

これからの社会は、クリエイティブな分野に活躍する女性、リーダーとして、全体をプロデュースできる女性、根気強く仕事を続けられる女性がクローズアップされ、そこでは女子美の卒業生がたくさん活躍しています。

21世紀の本学は新しいプログラムを持って進んでいきます。

皆さんは、一生に残る作品をつくってください。一生に残る友達をつくってください。それが大学です。

大学院美術研究科長
**橋本　信**
（はしもと まこと）

芸術学部長
**小倉 文子**
（おぐら ふみこ）

短期大学部長
**木下 道子**
（きのした みちこ）

# Message・2 新任専任教員紹介

## 川村 貞知
**kawamura sadatomo**

芸術学部 メディアアート学科 准教授

1970年東京生まれ。東京藝術大学デザイン科卒業、卒業制作賞上賞。同大学院修了。株式会社電通アートディレクター、文化庁派遣芸術家在外研修員ニューヨーク派遣（メディア芸術分野）を経て、Sadatomo Kawamura Design設立。毎日広告デザイン賞第一部最高賞、ニューヨーク ADC金賞、他。

メディアアート学科にて、広告･グラッフィクデザインや、プロジェクト企画・プレゼンテーション等の授業を担当させて頂きます。
これまでの経験を活かして、就職活動や将来も見据えた実践的なサポートが出来ればと思っています。
また、皆さんと一緒に、社会とのつながりを意識した、女子美ならではのプロジェクトワークをおこなって行きたい思っています。
どうぞよろしくお願いします。

## 立花 文穂
**tachibana fumio**

芸術学部 デザイン学科 准教授

1968年広島生まれ。武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科卒業。東京藝術大学大学院美術研究科修了。アーティストとして国内外で展覧会をする傍ら、書籍、雑誌などの編集やデザインを手がけたりもする。

主に文字、紙、本を素材・テーマに制作活動をしています。これは、僕が生まれ育った環境が大きく影響しているようです。表現は、個人のアイデンティティから生まれてくるものだと思います。何が好きで、何が嫌いか。何処からきて、何処にいくのか。僕の大学生活は、悶々とそのことばかり自問自答していたように記憶しています。それは、現在でも続いていて考えは、日々変化します。ものをつくることの厳しさ、苦しさ、そして、楽しさをすこしみなさんと共有できたらいいですね。

## 中村 一美
**nakamura kazumi**

芸術学部 絵画学科洋画専攻 教授

1956　千葉県生まれ
1981　東京藝術大学美術学部芸術学科卒業
1984　東京芸術大学大学院美術研究科油画修了
個展
'99 セゾン現代美術館
'02 いわき市立美術館
'06 クムサンギャラリー（韓国）
'08 南天子画廊
グループ展
'89 ユーロパリア JAPAN、ゲント市立現代美術館
'92 形象のはざまに、東京国立近代美術館
'93 90年代の日本、デュッセルドルフ市立美術館
'95 JAPAN TODAY、ルイジアナ美術館
'03 プレミオ・ミケッティ、ミケッティ美術館（伊）等。
著書に『透過する光』（玲風書房）がある。

現代の絵画表現に主として関心をもって活動しています。絵画とは、個人の表現であると同時に、社会の網目の中において形成される客体的な存在と思っています。女子美術大学という場の中で、そのようなことを念頭におきつつ、各学生の表現に真摯に向かいあい、芸術の価値とは何なのかを共に考察・実践してゆきたく思っております。

## 能見 英子
**nomi eiko**

芸術学部 デザイン学科 准教授

女子美術大学芸術学部　産業デザイン科卒業
㈱東北新社 CM本部にて CMディレクター
退社後フリーランス CM・映像ディレクター
ACC賞など受賞多数

デザイン、映像、は時代の中で生きています。
相模大野の環境の中で，クリエイティブの中心地の生きたデザインと時差のない感覚で、デザインや映像をみなさんと一緒に柔軟に研究していきたいと思っています。
一緒にクリエイティブな環境を女子美の中で盛り上げていきましょう。
よろしくお願いします。

## 福士 朋子
**fukushi tomoko**

芸術学部 絵画学科洋画専攻 准教授

青森県生まれ。1990年女子美術大学芸術学部絵画科洋画専攻（油絵）卒業、92年東京芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻油画修了、98-00年文化庁芸術家在外研修（米国）、00年ペンシルヴァニア・アカデミー・オブ・ザ・ファインアーツ大学院修士課程修了、05年東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻油画修了。
主な個展 /97年ギャラリー山口、98年 INAXギャラリー、05年藍画廊、art& river bank、04,07年ギャラリーアートもりもと。主なグループ展 /「VOCA展 '99」、「DOMANI・明日展2003」、05,07,08年「アートフェア東京」。

絵画制作と並行してマンガを描いています。現在はコマ割りによる空間や主体の変化といったマンガの構造や文法を絵画に融合させた作品を制作しています。女子美での様々な出会いや模索していた時間が、ものを生み出す核になっていると実感します。自身の感覚を信じ、それぞれが自らの表現方法を見つけてほしいと思います。表現することが既成の認識や制度への問いかけに繋がっていくよう私自身も共に学んでいきたいと思っています。

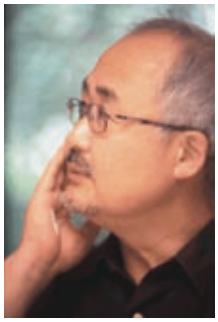
## 村田 朋泰
**murata tomoyasu**

芸術学部 デザイン学科 准教授

1974年東京生まれ
2002年　東京芸術大学大学院デザイン科専攻伝達造形修了
主な受賞歴 第５回文化庁メディア芸術祭 / アニメーション部門優秀賞《睡蓮の人》
PFF アワード2002/ 審査員特別賞《睡蓮の人》
第９回広島国際アニメーションフェティバル / 優秀賞《朱の路》
アヌシー2003国際アニメーションフェスティバル 推薦作品上映《朱の路》
主な個展 2006年「村田朋泰展　俺の路･東京モンタージュ」目黒区美術館（東京）
2008年「村田朋泰展　夢がしゃがんでいる」平塚市美術館（神奈川）

学生時代からアニメーション表現をおもな創作としていますが、アニメーションが前提としてある前に、形式やルールに疑問を持ち、問題をあれこれと考え、さまざまな視点に思いを巡らせることのほうがはるかに重要です。忘れられた場所、個人的な記憶、独自の脱線や言い換えをおこなうことでみえてくる可能性を自分なりに考えることが学生生活で学ぶべき課題だと思います。共に考えていければと思います。

# Message ・3 退職教員からのメッセージ



**赤沼 國勝**
akanuma kunikatsu
芸術学部 デザイン学科 教授

建築家としての経験に照らせば、病院や幼稚園など公共的施設の設計を行う際、力ある数人だけの考えで進めた場合はおおかた失敗する。まして住宅設計では大失敗必定。かといって多数意見が良いかといえばそうでもない。誰も気づけない点に気づけた少数者の意見は格段に重要である。大学の教室が一つのチームとなり学生の気づきのランプが点灯する手法は、個性的で説得力ある作品を生む。各種デザインゲームや豚牧場など多くのワークショップでの教授法の有効性にも自分発見できた女子美での23年間。女子美術大学に、とりわけ学生諸君に感謝。

**立石 雅夫**
tateishi masao
芸術学部 メディアアート学科 教授

眼前の痕跡に記憶の糸をたぐり寄せて照合しながら横道にそれて行きつ戻りつの一人旅のように、書名に惹かれて出会った書物を引っ越しのダンボール箱から取り出しながら読み返せば無為の時間が蘇る。
時空蒼茫／朝の影の中に／夢見つつ深く植えよ
バビロンの流れのほとりにて／みる きく よむ
帰林鳥語／稱心獨語／黄金の盃／銀の水
象徴交換と死／シャドウ・ワーク／言葉と物
星に生まれた子供たち／永遠の現在／眼と精神
人生の特別な一瞬／忘れられる過去…
暇つぶしの書物の旅と重ね合わせる余生の旅を今までのようにこれからもたのしみます。

**川崎 秀昭**
kawasaki hideaki
芸術学部 基礎教養系 教授

女子美での生活と色彩

企業人から転職した私にとって80年代～90年代中頃までの女子美での教員生活は、実社会とは異なる時間的な余裕を享受できた貴重な日々でした。毎年、7月に入り夏休みになると軽井沢の寮に友和会のメンバーが集合しゴルフに興じた思い出は心地よい記憶として残っています。色彩の授業では、四苦八苦しながらポスターカラーで色を創って課題に取り組んでいる学生たちの様子が目に浮かびます。学生たちは完成した作品にPC主導の現在とは異なる達成感を抱いたことでしょう。近年、不自由な身体になった私を気遣ってくれた方々に感謝。

**高間 夏樹**
takama natsuki
芸術学部 絵画学科洋画専攻 教授

≪一月もあっという間、相変わらずお元気そうでなによりです・・・。いよいよ退職モード♪個室の引つ越し準備に追われる日々です。20数年間ため込んだモノの整理で四苦八苦！昔の書類、捨てるに捨てられない。目を通してると今は亡き懐かしい先生方の名前が気になるし、ホコリだらけの貰いものも手にとつて見てるとやつぱり捨てられない。学生に返却しそこなつたレポートもちょつと読みだすとこれが又アキマヘン！数点残すつもりが結局は、全部段ボール箱に詰め込むハメに・・・。近いうち一杯やりましょう♪≫
以上は友人に最近送つたメールです。

**瀧本 英男**
takimoto hideo
芸術学部 工芸学科 教授

着任以来改革の連続で、いつも足踏み状態のなか、特に印象深かったのが、石橋先生主宰のワイン研究会でした。「ただ、の呑み会」と思いきや、その場はウィットやエスプリの飛び交うハイブリットな空間で、領域を越えた交歓がありました。ここでの知的トレーニングは、ワインと共に吸収され学生に還元されたと自負しています。試飲したワインは多種済々！「天國の扉が開く」と言う「ペトリュス」が今手元で時を貪っています。門番には託さず、退職の記念に睡りを解こう！さすれば天國の扉は誰が・・・？

**見城 美子**
kenjyo yoshiko
芸術学部 デザイン学科 教授

1969年、助手として勤務を始め、気がつけば本当に長い時間が経ちました。結婚して退職を考えた時、「卒業生として母校で頑張りなさい」と、当時、お世話になった教授に励まされたことが今も心に残っています。杉並から相模原への移転、創立100周年など、母校のいくつもの節目に立ち会い、大学が変わって行く姿を見ながら過ごした39年間でした。学生とともに学び、元気をもらい、多くの方々に出会い、支えられて来ました。来年、110周年を迎えますが、今までがそうであったように、これからも女子美は女子美らしくいてほしいと願っています。

Interview

OGインタビュー

# イラストレーター　べつやく れいさん

**本学の卒業生で、Webサイト『デイリーポータルZ』の人気ライターとして活躍中のべつやく れいさん。“やらなくてもいいこと”だけど気になるコトやモノについて、ユーモアを含んだ観察眼を持ち、時には体当たりで調査を繰り広げる。独特のタッチのイラスト、笑わずにはいられない発想力。べつやくさんの手にかかると、一見ムダにも思えることが“おもしろい”という価値を持つ。“おもしろさの追求”と、にじみでる“ゆるさ”――不思議な魅力のある、べつやくれいさんの世界を知るべく、お話を伺いました。**

**――べつやくさんの現在のお仕事について教えてください。**

基本的にはイラストレーターという肩書きです。でもイラストの仕事は意外に少ないんです。今一番比重の大きい仕事は、ニフティのWebサイト『デイリーポータルZ』のライターの仕事。レポート風にまとめた記事を月３回描いています。

ほかには、４コマ漫画をふたつ描いています。ひとつは、フリーペーパーのPR誌「アスペクト」（アスペクト）で『宇宙くん』。私、宇宙人を描くのが好きなんです。どうしてかというと、ウマイとかヘタとか言われなさそうだから（笑）。もうひとつは、月刊ビジネスアスキー（アスキー・メディアワークス）の『サラリーマン ミイラくん』。ビジネス誌なので、“サラリーマン”という設定にしました。こんなタイトルだけど、これでも自分ではすごく媒体にあわせているつもりなんですが・・・。

## なりたいものが見つからなかった学生時代

**――女子美には中学・高校の付属から通っていましたね。**

小学生の頃は、運動神経が悪くて体育ができなくて……。反対に図工は好きで、絵は小さい頃から描いていました。それで学校の先生の勧めもあって、付属中学を受験したんです。女の子だけの学校生活はものすごい開放感でした。授業中、ノートに先生の似顔絵を描いたりして楽しんでいましたが、イラストレーターになろうといった夢はなかったんです。中学生の頃は、「大人になればどうにかなるだろう」と思っていました。実際は、大学生になってもなりたいものが見つからなくてすごくあせったんですが（笑）。

**――大学ではどんな学生生活を送っていたのですか？**

高３で洋画かデザインを選択する際、就職もデザインのほうが有利かなと思い、デザインを選びました。その流れで大学ではデザイン科造形計画専攻に進みました。講義の単位は１、２年次でほとんど取ったのですが、そのついでに緊張感もとれちゃった。その後は、先生に申し訳なかったと思うくらい、学校に行かなくて。課題が出る日だけ行って、あとはアルバイトをしていました。そして提出ぎりぎりになって作品を作り、それが恥ずかしくてこっそり置いて帰る、なんてことをしていましたね。この頃の「何かを限られた時間で作る」という経験は今も生かされているけれど、完成度においては大学の頃より少しは上達している気がします。学生生活は作品を作るという方向ではなくて、楽な方に流されていましたね。

## 消去法で選んだ仕事がイラストレーター

**――卒業後はすぐイラストレーターになったのですか？**

保険会社の外交員として２年働きました。実は大学を留年してしまい、おまけに何をやりたいかわからなかったから就職も決まらず、あせって保険会社に入社したんです。でも、外交員の大変さを全然わかっていなかった。そもそも、積極的にうちとける性格ではないので、仕事も自分に合っていなかったんですね。いやだ、いやだと思う毎日でした。

その次は、派遣で出版社の事務の仕事。居心地が良かったこともあり、５、６年続けました。最初の何年かはフリーになることも、まったく考えていませんでしたね。

フリーになる前に描いていた落書き

**――仕事を続けていくうちに、だんだん自分のやりたいことが見えてきたのですか？**

というより、「事務には向いてない」と思ったんですね。じゃあ、何ができるかなと考えたら「わりと何もできないな」と（笑）。よく考えたら、そもそも会社に勤めること自体が向いていないんじゃないかと。朝起きるのも苦手だし、だったら家で仕事ができるフリーがいいかなと思ったんです。それで、あれもだめ、これもだめ、と消去法で仕事を考えて、イラストを描く仕事なら自分にできそうだと。

昔から落書きのようなものを描くのは好きだったんですが、よく同僚にちょっとした落書きを描いて渡していたんです。そうしたら、彼女は喜んで、捨てずにとっていて「こういうイラストっておもしろいよ」って言ってくれて。そのこともフリーになるきっかけになりましたね。

**――それで今後はイラストで食べていこう、と決心したんですね。**

いえ、そこまではっきりとは決めてなくて。「２年やってだめだったら次を考えよう。とりあえずフリーで一度やってみよう」という感じですね。実家暮らしだったので、親に「フリーになるので、しばらく全然収入がない状態になるだろうけど、家に置かせてください」と頼みました。

とにかく最初は全然仕事がなくて（笑）。しかたなく雑誌社に電話して作品集を持ち込んだりしました。初仕事はネコ関連の雑

誌で付録のハガキのイラスト。とても嬉しくて、2日くらい時間をかけて描きました。

**――2003年には初めての絵本『しろねこくん』を出版されましたね。**

あるとき父（別役実氏／劇作家、童話作家）が「フリーになるとはいうものの、いったい何をやっているのだ？」と聞いてきたので、描いたイラストを見せました。その後、父を通じて、小学館の方にイラストを見てもらったんです。そのなかの「ネコと遊ぶ」「ネコで遊ぶ」のような助詞の活用をテーマにしたイラストを「お話でもないし、よく分からないけど、おもしろい」と言ってくれて。編集の方の「描きためたら本になるかも」という言葉に「描きます、描きます」と即返事をして（笑）。半年くらい描いては見せに行くことを繰り返して「本にしましょう」という話になりました。もう嬉しくて「これで、わぁーっと仕事がいっぱい来るぞー」と舞い上がっていたら、全然こなかったんですけどね（笑）。

それから、両親もだいぶ喜んでいましたね。私を中学から女子美の付属に入れたのに、合わない仕事についたりして「ひとりで生きていけるのか」とすごく心配だったらしいんですよ。だから、むしろ本が出た、ということよりも、私が“何かになろうとしている”ということに安心していました。

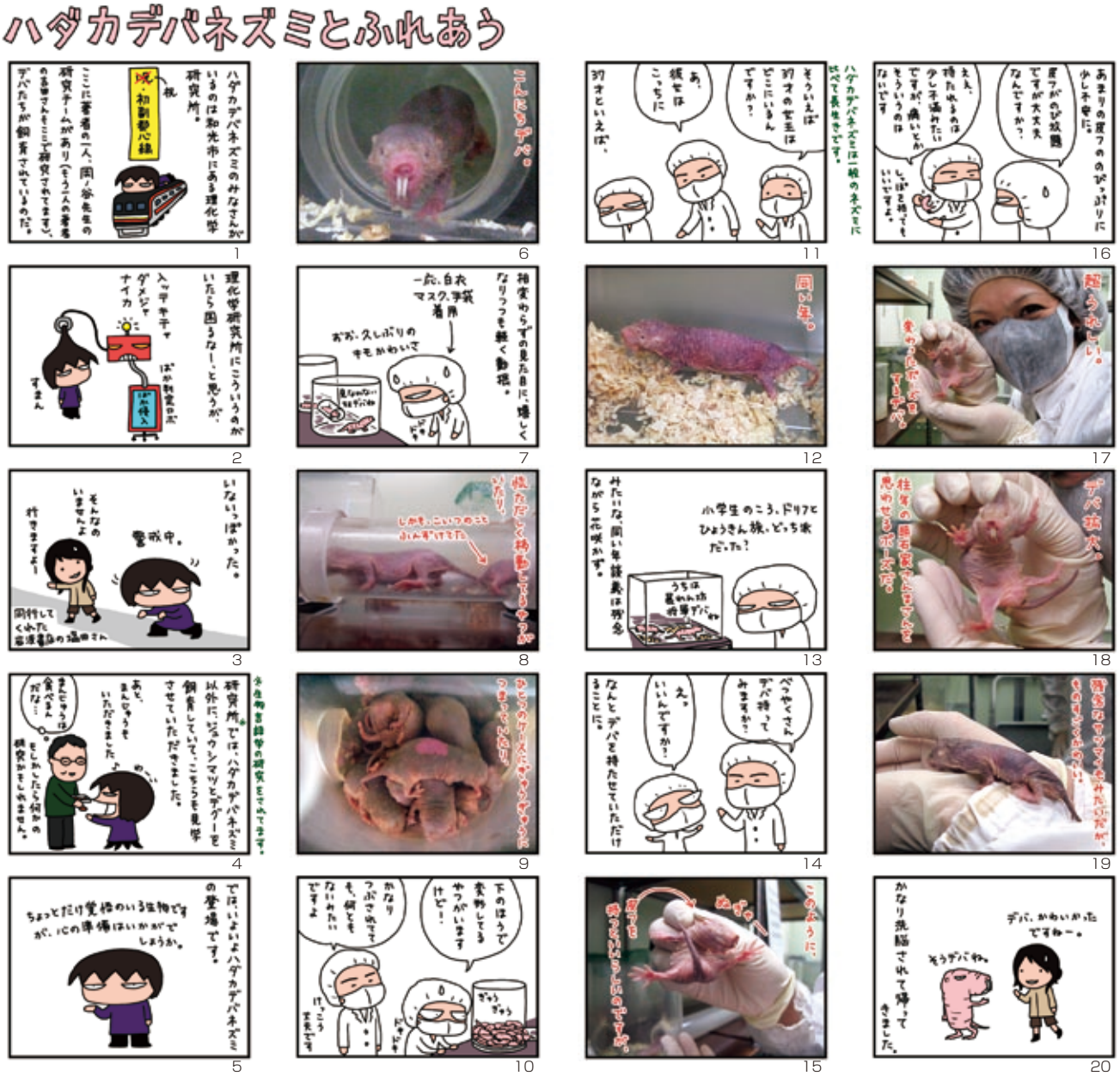
## ふだんの生活で感じたことを企画する

**――ニフティの『デイリーポータルZ』のライターとしての仕事のきっかけは何ですか？**

このサイトは以前からファンで、こういうのやってみたいなあ、と思っていたので、ライターに応募をしたんです。ゲストライターとして一度描いたあと、しばらくして自分から連絡したら「じゃあ来月から」と言われて。2004年の10月から定期的に記事を書くようになりました。

**――『逆さまになって食べる』『「ねこふんじゃった」の件でねこにあやまりたい』など、おもしろい記事がいっぱいですね。企画はどうやって考えているのですか？**

特にいつひらめく、というわけではなく、ふだんからこういうことできるかな、と考えてメモをしています。『デイリーポータルZ』でのライター同士の会議で「こういうことやりたいんだけど、どうやったらうまくいくかな？」と相談したりもします。流れとしては、企画を出して、上の人にOKをもらい、取材、記事を描いて掲載です。火・水あたりでテーマを決めて、翌週の木


ハダカデバネズミとふれあう
ハダカデバネズミのみなさんがいるのは和光市にある理化学研究所。
ここに著者の一人、岡ノ谷先生の研究チームがあり（もう二人の著者のまゆみさんとミミ）研究されてます。デバたちが飼育されているのだ。
理化学研究所にこういうのがいたら困るなー、と思うが、
すまん
ばかやろー
警戒中。
そんなのいませんよ
行きますよ
同行してくれた
いないっぽかった。
研究所では、ハダカデバネズミ以外にシロウシマツとヂガーを飼育していて、こちらを見学させていただきました。
あと、まんじゅうをいただきました。
まんじゅうは食べるんだな…。
もしかしたら何かの研究かもしれません。
少生物言語学の研究をしてます。
ちょっとだけ覚悟のいる生物ですが、心の準備はいかがでしょうか。
では、いよいよハダカデバネズミの登場です。
こんにちデバ。
一応、白衣マスク、手袋着用
おお、久しぶりのキモかわいさ
なかなかうずの見た目に、嬉しくなりつつも軽く動揺。
しかも、こいつのこと ふん者だけでした。
ぜんぜんしく移動ことりやつが いたり。
しかも、こいつのこと ふん者だけでした。
みたこのケージにぎっしりすきまなくつまってくれたり。
下のほうで変動してるやつがいますけど！
かなりつぶされてても、何ともないみたいですよ
けっこうまもです
ぎゅうぎゅう
ぎゅうぎゅう
ぎゅうぎゅう

曜日には掲載になるので、スケジュールは毎回ぎりぎり。もう必死に“わー”って描きます。取材を含めると３・４日はかかっちゃいますね。

**――べつやくさん発案の、気持ちや感想を円グラフで表す『べつやくメソッド』は、いろいろな会社がツールとして注目していますね。簡単に円グラフが描けるソフトまで公開されていますが…**

若干『べつやくメソッド』という言葉が一人歩きしちゃっていますが（笑）。そもそもはアップルコンピュータのCMで、旅の思い出を“ブログにできるというMac”が、“円グラフにできるというパソコン”を否定しているシーンを見て、反対に、円グラフみたいなもので思い出を表すほうがおもしろいんじゃないか、と思ったんです。それで『デイリーポータルZ』で“円グラフで気持ちを表す”ことをテーマにしてみたんですね。でもこれ、企業などで使っても何の役にもたたないんだけど（笑）。

PR誌アスペクト「宇宙くん」

## 読者にちゃんとおもしろさが伝わるように描く

**――記事を描くとき、こだわっていることはありますか？**

一番気をつけているのは、ぱっと見て、自分が何をやったかわかってもらうこと。内輪ネタにならないように、そして自分が楽しいだけで終わらずに、どうして楽しかったのか、読者にちゃんとおもしろさが伝わるように描きたい。だから、描き直しすることもあるし、構成を考えるのが一番の悩みどころ。もう毎日苦労しているといってもいいくらいです。あまり絵がうまくないので、簡単に描けて上手に見えたり、見てすぐ何、と分かるように描くことはけっこう大変。だから、もう背景はいらないかなとか思ったりも（笑）。

インターネットは、本よりも親しみやすく見えるもの。笑ったり、わぁーっとなっている自分の顔や姿を出すことで、よりリアリティを感じてもらえると思うので、自分の写真を出すことは抵抗ないです。『デイリーポータルZ』では、どのライターも自らが出て楽しいことをやっているんですよ。

**――読者からの反響はありますか？**

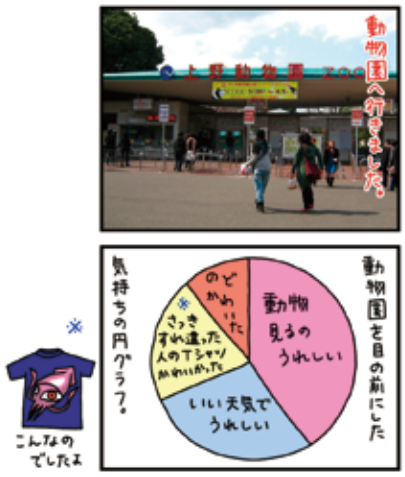
あの企画どうだったかな、と思うこともあるのですが、メールなどはあまりないですね。たまに『デイリーポータルZ』のイベントに来てくれた方から「おもしろかったですよ」と言ってもらえることはあります。

昨年、『ハダカデバネズミ 女王・兵隊・ふとん係』（岩波科学ライブラリー）の挿絵を描きました。きっかけは、私が以前に『デイリーポータルZ』で描いた、ハダカデバネズミに関する記事が、研究者である著者の目にとまって、このお話をもらったんです。実際に研究所にも見学しにいって、触らせてもらったりしたのは、かなり嬉しかったですね。

## ハダカデバネズミを世の中に広めたい

**――フリーになられてからの生活はどうですか？**

ここ最近、収入も安定してようやく人並みの生活になりました。フリーは昼間の時間を自由に使えるし、平日の昼間はどこも込んでいないので、取材に行くのもスムーズですね。いつもは、昼頃起きて、午後に仕事を始めて、翌日の3時･4時くらいに寝る、といった完全夜型生活です。仕事を早くはじめないと、あとが地獄ってわかっているのに、コンビニに行ったり、テレビみたり、ついダラダラしちゃうんですよね。しかも、会社員時代よりも、睡眠時間が少なくなっている気が…。



ニフティWebサイト「デイリーポータルZ」（2007年3月17日「円グラフで表そう」）

**――今後の目標は何かありますか？**

特にないですね（笑）。あ、ハダカデバネズミはもっと広めていきたいな。体に毛がないし、だいぶ気持ち悪い動物ですが、４年も見ているとかわいく見えてくるんですよ。動物好きなので、動物を観にいく取材をなるべく考えたいですね。

**――最後に、女子美の学生にアドバイスをお願いします。**

留年はしちゃだめです。私は学生時代、苦労して作った作品がないんです。でもあのとき苦労して作らなきゃいけなかったと、今になって思うんですよ。

自分がなりたいものがなるべく早く決まっているほうが、やっぱり回り道をしなくていい。でも今、自分がどうしたいか分からなくても、本当に見つけなきゃ、と思ったらきっと見つかります。もしもなりたいものがなかったとしても、あまり悩まなくて大丈夫。なりたいものが、ある日突然見つかったりすることもありますよ。

**べつやく　れい**
1994年、女子美術大学デザイン科造形計画専攻（現 芸術学部）卒業。会社勤務を経て2001年よりイラストレーターになる。2003年よりニフティのWebサイト「デイリーポータルZ」のライターとして活動を開始。著作は『しろねこくん』（小学館）、ニフティの記事をまとめた『ココロミくん』（アスペクト）、『ひとみしり道』（メディアファクトリー）など。

※表紙の4コマ漫画「ゾウリムシからいまに至るまで」は、本誌のために描き下ろしてくださいました。

Close up

# クローズアップ⑤ オストリッチーズ ～学生プロジェクト紹介～

相模原キャンパスがある神奈川県相模原市に、ダチョウの牧場があるということをみなさんご存知でしょうか。今回は、その牧場で産み落とされたダチョウの卵を使って、小学校でのワークショップや環境コンテスト出場など、躍進的に活動する「オストリッチーズ」をご紹介します。

お話をうかがったメンバーの3名
左から：室山さん（デザイン学科1年）、駒井さん（デザイン学科3年）、後藤さん（デザイン学科3年）

## 「OSTRICHES」＝ダチョウ

オストリッチーズが誕生したのは2006年。きっかけは、相模原市にある「ダチョウ牧場」を市民と結びつけるきっかけづくりができないものかと、話を持ちかけられたことに始まります。試行錯誤の末、本来であれば産業廃棄物として処分されるダチョウの卵に絵を描き、植木鉢にし、苗木を育てる「卵の森プロジェクト」を発案。ここからオストリッチーズの活動が始まりました。

オストリッチーズ設立当初から活動を続ける駒井さんは、当時の様子をこう話します。「はじめて見るダチョウの卵を前に、これをどう生かせばいいのか、何も思いつきませんでした。オストリッチーズ誕生から、ダチョウの卵を植木鉢として活用するという案が出るまでの1年間は、何もできず、オストリッチーズ闇の時代でした（笑）。」はじめて見る大きくてインパクトのある卵は、とても美しく、殻を割ることすらためらわれたそうです。

## 小学校でのワークショップ

昨年8月、ダチョウの卵を植木鉢として活用する「卵の森プロジェクト」が、相模原市立双葉小学校のサマースクールで実施されました。「小学校の先生を前に、はじめはおぼつかなかった打ち合わせも、回を重ねるごとにだいぶ板についた」と駒井さんは話します。小学校からの依頼もあり、メンバーが講師になって環境問題を子どもたちに話す姿も見られました。プロジェクトは子どもたちにも大好評。「10年後、大きくなった木で木登りをしたい！」そう話す子どももいたそうです。

小学校で実施された「卵の森プロジェクト」

## 「エココン2008」出場。準グランプリ!!

そして12月、これまでの「卵の森プロジェクト」の成果を携えて、学生の環境活動を評価し、表彰するコンテスト「エココン2008」に臨みました。コンテストで各参加校に与えられたのは、5分間のプレゼンテーションのみ。わずかな持ち時間の中で、女子美生の強みを生かし、発表にイラストを多用したことが功を奏しました。分かりやすいプレゼンテーションに聞き入る観衆を見て、大きな手ごたえを感じたそうです。「堅苦しくなく、私たちらしい発表ができた」と後藤さんもその様子を満足そうに話します。

ダチョウのきぐるみを着て発表に臨みました！

結果はなんと準グランプリ。限られた準備期間で、このような成功を収めるには並々ならぬ努力があったそうです。室山さんは、出場までの様子をこう話します。「確かに忙しい毎日でした。検討と修正を繰り返し、練習に練習を重ね、エココン当日を迎えました。努力が実って、私たちの活動が評価されて、本当にうれしかった。」1ヶ月間という準備期間でメンバーをまとめ、指揮を執ったのは後藤さんと駒井さん、オストリッチーズの代表を務めるこの二人でした。「思い返すと本当にハードスケジュールでした。練習の毎日に、みんな本当によくついてきてくれたと思います。」

## これからの活動は…

「将来的に、野生のダチョウが生息する、発展途上の地域で「卵の森プロジェクト」を実施してみたいと思っています。現地の環境への問題提起や、地域の活性化にも効果があるのではないでしょうか。このエココンをきっかけに、どんどん視野が広がりました。このようなスケールの大きな話も、少しずつ現実的になってきたような気がします。」と後藤さんは話します。

2006年の設立当初はプロジェクトも軌道に乗らず、メンバーのモチベーションを維持することすら難しい状況だったそうです。「相模原市からの大きな話。おもしろそう。」と、何気なく参加したこの計画をここまでまとめあげたのは「諦めたくない。何が何でも成功させたい。」という意地だったと後藤さんと駒井さんは笑います。「活動を通じ、これまで気づきもしなかった身の回りの自然環境に興味をもつようになりました。一時的な流行に流されるのではなく、長い目でいろいろなことを考えられるようになったと思います。」と後藤さんはこれまでの変化を振り返ります。

定期的に行われる話し合いでは、積極的に意見が交わされ、効率的に進行する様子に、彼女たちの真剣さがうかがえます。

現在、オストリッチーズでは「卵の森プロジェクト」を継続しながら、植木鉢のほかに卵の使い道がないか検討中。既にいくつかの案の中から、実現に向けて話し合いが進められています。今後も進化が期待される「オストリッチーズ」から目が離せません。

【オストリッチーズHP】
http://www.joshibi.net/f-design/ostriches/
【E-mail】
dachous@joshibi.ac.jp

International

# 2008年度クイーンズランド・カレッジ・オブ・アート 海外スプリング・スクールの報告

本学の学術交流協定大学である豪州クイーンズランド・カレッジ・オブ・アート（以下 QCA）において、2009年1月23日から2月23日までの間、海外スプリング・スクールが開催されました。このスクールは、本学と QCA が共同で企画した美術・デザインの実技授業を中心に構成されており、今年で第二回目の実施となりました。参加した9名（芸術学部8名、大学院修士課程1名）はオリエンテーション、事前指導、英語研修を約2ヶ月間にわたって受講し、出発しました。

英語研修

**主なプログラム**

**第1週目　グループ交流／自己紹介プロジェクト+ジュエリー・プロジェクト**

グループ交流／自己紹介プロジェクトでは、まず、2人一組となってお互いをドローイングしました。その後交換し、予め日本から持ってきた自分の家族の写真や家族の歴史が込められたモノを自分なりに加工して描き込んでいきました。紙の大きさ、形、枚数は自由に設定でき、個性溢れる自己紹介作品となりました。

ジュエリー・プロジェクトでは、素材として銀、銅、真鍮が渡され、オーストラリア滞在の印象や自分が好きなモノ・形をデザインし、動物や植物など様々な形のペンダントが出来上がりました。

ジュエリー・プロジェクト

**第2週目　グラスハウス山プロジェクト+インディジネス・アート・プロジェクト+版画**

週の始めはあいにくの雨の中、郊外のグラスハウス山での屋外スケッチからスタート。自然現象で奇形となった山々や周辺の

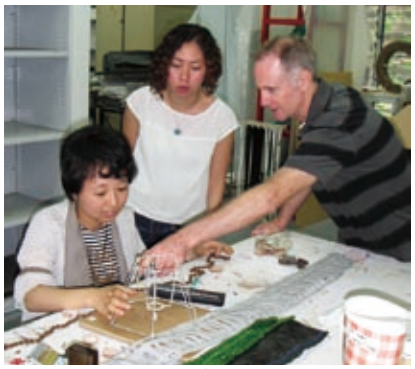
一緒に参加したQCAの学生

森を探索し、雄大な自然をスケッチブックやカメラに収めました。キャンパスに戻った後、山の印象や大自然のエネルギーをドローイングや紙を使った立体物などで自由に表現しました。

インディジネス（先住民）・アート・プロジェクトでは、オーストラリア先住民である講師陣から先住民族の歴史や文化的側面についてのレクチャーを受けた後、「メモリー・ボックス」を制作しました。これは、アボリジニー独特のアートで、小さな箱の中に家族の歴史や風習を表す写真やモノを配置して作品として完成させるものです。版画では、モノ・プリント技法とエッチング技法を習った後、二つの技法を組み合わせたりするなど自分のテーマに沿った版を作り、数多くの版画を刷り上げました。

**第3週目　屋外プロジェクト+コレクター・ギャザラー・プロジェクト**

屋外プロジェクトでは街の中心部にある植物園へ。ガイドから園の成り立ちや植物の説明を受けながら園内を探索し、スケッチや写真撮影をしました。翌日、教室でスケッチ等をもとに各自が感じたオーストラリアの自然を水彩画やドローイングで表現しました。なんといっても興味深い経験


コレクター・ギャザラー・プロジェクト

だったのは、コレクター・ギャザラー・プロジェクト。リサイクル・アートに挑戦する課題です。ガラクタとしか思えないような物を売る店に出かけ、15ドル以内で材料を購入し、これらを使って立体作品を制作します。QCAの学生も参加する大規模なものとなり、交流が深められました。

**第4週目　修了制作**

最後の課題は修了制作とその発表です。その完成度やこれまでの制作作品をどのように展示するかも評価されます。修了作品展会場には QCA の講師陣・学生・スタッフやホームステイ先のホスト・ファミリーなど多くの人々が訪れ、賑やかな雰囲気に包まれました。翌日、学生によるプレゼンテーションと講師による講評の後、QCA 学部長から修了証書が全員に手渡されました。続いてランチパーティーが催されて、お世話になった方々との別れを惜しみつつ、スクールは終了を迎えました。

修了制作展の準備の様子

ホストファミリーも修了制作展を鑑賞

# Graduation・女子美スタイル☆最前線

2月11日～15日まで、『女子美スタイル☆最前線』が横浜のBankART Studio NYKで開催されました。今年で3回目となる本展覧会は、芸術学部、短期大学部、大学院の全学科から選抜された作品を、卒業の記念としてではなく、表現者としての第一歩になることを目指して学外の会場に展示するというイベントです。作品は、アートフォーム（表現の形態）ではなく、作品に潜在するテーマに沿って分類され展示されます。今年は、「芸術・女性・社会」というグランド・テーマに基づいて、フロアごとに"the spirit of inquiry（探究心）"（1F）、"open-mindedness（虚心）"（2F）、"creative power（創意）"（3F）という3つの視点によって構成されました。

## JOSHIBI rainbow award

2月11日に展覧会場でおこなったオープニングパーティにはゲストとして本学短期大学部の卒業生で日本画家の松井冬子氏にお越しいただきました。また、松井冬子氏を含めた7人の選者から7名の学生に「JOSHIBI rainbow award」と題した賞が授与されました。

**Red Prize：小山登美夫氏（ギャラリスト）**
**受賞者：秋元理恵（短期大学部専攻科）**
**「はたけばたけ」**
（作品写真は12ページ参照）
小山：秋元さんの作品は記録のようになっています。畑の作っている過程が記録されていって、描くっていうこと自体がコミュニケーションになっていて、自然に無理なくできているところに非常に好感がもてた。

**Green Prize：杉田敦氏（本学教授）**
**受賞者：兼子紗都子（短期大学部造形学科）**
**「撹拌された記憶」**
（作品写真は12ページを参照）
杉田：僕自身がここにあるほぼ全ての作品を選んだので、全ての学生に賞をあげたい。中でも、「芸術」「女性」「社会」のグランド・テーマにマッチしていると思ったので選びました。「編む」という女性特有といわれてきた作業を使いながら、素材が電気のコード。まさに3つのテーマを体現しています。とてもいい作品だなと思いました。

**Orange Prize：押金純士氏（「デザインの現場」編集長）**
**受賞者：福澤真由（芸術学部デザイン学科）**

「silphy －ひかりをあそぶプロジェクト－」
押金：どの作品もかなり面白かったので迷いました。これは、プロトタイプとしての仕上がりがすばらしかったです。日本的な障子のイメージもあって、紙のようにも見えますが、実際は塩化ビニールで、素材の選び方も面白かった。できれば、影がもっときれいに見えるように方法を探ってほしいと思いました。

**Yellow Prize：奥村靫正氏（本学教授）**
**受賞者：藤田まゆみ（短期大学部専攻科）**

「○○」
奥村：作品としては未完成ながら、時系列というか、集積を基にして展開するタイプっていうのは、女性には多いですが、それを力技、物理的に強いものとして残したということにインパクトがあった。

**Blue Prize：北澤憲昭氏（本学教授）**
**受賞者：菅野智美（芸術学部デザイン学科）**
**「しみの標本」**
（作品写真は11ページ参照）
北澤：自宅や学校など色々な場所の壁に残された染み、傷、落書きなどをデジタルカメラで撮影して、それをプリントアウトしたものを、染みや傷の形に沿って千切って壁にピンで留めた作品です。採取場所のデータを記したノートとセットになっています。つまり、標本作製の手続きに従って、自分の生活している世界の断片を集めたわけですが、その断片性が世界そのものよりリアリティをもっている。そういう感じを受けました。リアリティというのは染みや傷が持っている記号性に由来しているのだろうと思うのですが、これは、わたしたちの世界が記号化しているということでもあります。それだけではなくて、断片のもつ色や形が、とてもおもしろい。まるで笑いさざめいているようで、そんなところにも心を引かれました。

**Indigo Prize：佐野ぬい氏（本学学長）**
**受賞者：市川加織（短期大学部造形学科）**

「GRINDING WORLD -station-」
佐野：私は駅を見るたびにノスタルジーを感じます。私が思う駅とは全然違う駅。それが面白いと。彼女に、あなたは子どもの頃からの工作オタクではないか？と聞くと、「いや。これをやっているときに楽しくやっていない。面白くなかった」「数ヶ月間苦しんで作った。」と。またそこも気に入った。私には絶対にできない、羨望のまなざしでこの作品を見て選びました。好きじゃないのに無理やりやったのが気に入った。自分の知らない世界が開けますから。

**Violet Prize：松井冬子氏（日本画家）**
**受賞者：山田愛子（短期大学部専攻科）**

「田植え」
松井：この人は趣味で彼氏のひげやら鼻毛やらを抜いて、田植えをしていた。趣味で作った作品を選んでいいか迷いましたが、気持ち悪さがいいなと思って。私は父からよく「売れるような作品をつくったら芸術家はおしまいだ！」と言われてきました。抜群の気持ち悪さがあった作品。すばらしい作品の中で頭にずっと残りました。

**松井 冬子さんからのメッセージ**

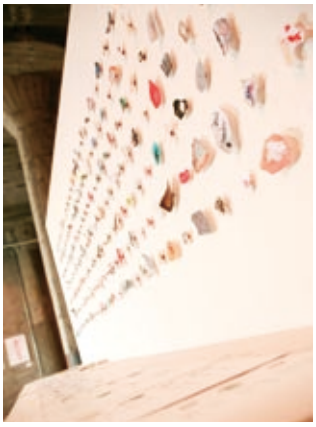
短大2年間、専攻科2年間、学部4年間、修士課程2年間を修了した皆さん、各々の女子美術大学での期間は、基礎固めをとげる成長をかみしめ、時間の早さを強く感じておられることと思います。ここを区切りとして世の中へ出て、自立を求めながら創造の研究を続ける方、女子美での期間をしばらく延長させる方、取る道は様々かと思います。いずれにしても入学、卒業は通過点であって、可能性を探る孤独な作業は情熱ある限り、生涯続きます。時に厳しい試練の逆境にあっても、芸術は、元来狭き門であります。黙々とした粘りが真価を問われます。私は15年前に女子美の短大を卒業しましたが、当時ろくな作品を作った記憶がありません。でしたので、この間女子美で講義をさせていただいた時に、久しぶりにお目にかかった先生からも「松井さんのこと、全然記憶にないんだよねぇ～」なんてあっさり言われるくらいです。当時はもちろん才能に自信なんかありません。才能は周りの人のほうがずっとありました。しかし、誰にも負けない努力をしたという自信を持つことはできる。そう思い、大学には誰よりも早く来て、誰よりも遅く帰りました。誰よりも真摯に作品に向かい、誰にも負けない努力をしました。そういう努力で自信をもつことはできました。そうしても、美術は努力でも根性でもないといわれました。でも、それでも諦めない気持ちを持ち続けることが大切だと思いました。悪あがきでもしつこくてもいいんです。好きなことを突き詰めること、諦めないと

思ったときこそ物事は始まるのだと思っています。これからも皆さんが、美術を信じ、航続距離の長い独自な創作活動を目指し、努力されることを願っています。新境地への出発と皆さんの大成を期待して、お祝いの言葉と代えさせていただきたいと思います。

# ギャラリートーク報告

**2月15日には杉田敦教授（芸術学部基礎教養系）と北澤憲昭教授（大学院美術研究科美術専攻）に美術評論家の福住廉氏をゲストに加えてギャラリートークを行いました。その一部をここでご紹介いたします。**

**菅野智美「しみの標本」**



**北澤：**僕が賞に選んだ作品です。建物の壁などの染みや落書きや傷をデジタルカメラで撮影して、染みや傷の形に沿って千切った断片を虫ピンで壁に留めて並べる・・・・そういう作品です。それだけのことなんですが、これらの断片が、建物や壁じたいよりも、むしろリアルに感じられる。あるいは、断片性が全体をリアルに想起させるといってもいい。そういうところに興味を覚えました。それから、傷や染みが記号性を帯びて、何ごとかを語り掛けてくる感じがするのもおもしろい。色や形がさざめく記号性です。もしかすると、この記号性がリアリティを作り出しているのかもしれません。つまり、ぼくらが住んでいる世界がある意味で記号化されているということです。この作品は、そういうことを感じさせてくれるんです。

**福住：**断片で全体を想像させるということは、すごく面白いなと思いました。今、ちょうど江戸東京たてもの園で、一木努さんというコレクターの方の展覧会をやっているのですが、一木さんは赤瀬川源平さんがやっていた路上観察学会のメンバーの方で、建物の解体現場に潜入して、断片を持ち帰るということを40年間もやってきた超奇特なおじさんなんですね。その40年間分集めたかけらを今一挙に公開しています。同じように断片から全体を想像させる、全体よりも断片の方が生々しいリアリティを持つということで言うと、一木さんは色彩やスクラッチ、汚れにリアリティを見出しているんですが、この人はそれらをぺらぺらの紙の表面に閉じ込めて、そこから全体を想像させようとしているところが、一木さんとは違って面白いなと思いました。

**杉田：**これはプロジェクト型の作品なのかなと。やはり40年間なり継続してやると面白いと思うんですね。短期集中で卒制のためにやっている感じもありますが、このまま続いていくともっと意味が変わるかなという感じもします。「継続性」とか「行為」と絡めると意味が見えてくる作品だなという感じがしました。

**南彩乃「一　いち」**

**杉田：**パッと見ると髪の毛がバッと並んでいるように見える作品ですが、聞いたところによると、髪の毛っぽく描く練習をとにかく延々とやっていて、今ではすべての髪の毛を描けるようになったのだとか。これ全部描いたものなのです。

**北澤：**実際に髪の毛だったら、これを賞にしてもいいなと思ったんだけど、描かれた髪の毛だと聞いたので、やめにしました。しかし、実にうまくできていて、上から塩化ビニールの板をかぶせて、本当に髪の毛みたいに見せるトリックはお見事です。髪の毛が散ったり集まったりしているうちに出来てくるかたちは、いってみれば吹きだまりの形象化であるわけで、この点は、発想としても面白いし、一種のフェティッシュとしての面白さもある。

**杉田：**短大の情報メディア系の指導が関係していると思うんですが、学生がこだわっていることをガーッとやらせるんですね。強迫観念に取り付かれているような感じの作品の方向にうまく向けさせる指導をしているのかなという感じがします。短大には例年そういう作家が多いんですね。ただ、これが単にグラフィカルな形状の面白さではないというところへの意識がどれぐらい

あるのかが、作品として成立するかどうかの分かれ目になると思います。

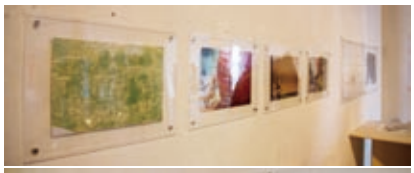
**福住：**髪の毛の長さがあまり長すぎないところがいいなと思いました。あまり毛が長いと、いわゆる女性性を強調したようなおどろおどろしい作品になりがちだと思うんですが、毛の長さがギリギリ男なのか女なのかよく分からない長さで押しとどめられているところが禁欲的でいいんじゃないかと思いました。見せ方もすごく奇麗ですし、投げやりな感じもすごくいいと思います。

### 秋元理恵「はたけばたけ」

**杉田：**小山登美夫賞受賞の作品ですが、これは僕も印象に残っていた作品で、畑の中で採れたものとかそういうものに描いたり、ドローイングにしたりしているものです。彼女の作品ですごく記憶に残っているのは、彼女は去年短大を卒業する時にも、この女子美スタイルに出品していたのですが、その時のギャラリートークで小山登美夫さんがその作品を見て、「僕はこういう作品は嫌いだ」と言ったんですね。今年、「畑のやつを賞に選んだ」と言うので、「あれ、去年嫌だって言っていた作家だよ」と言ったら、本人もすごく驚いていたんですね。「あ、でも何かあのこだわりがああいう形になると、何か僕もすごく好きなのかもしれない」と。作品についての好き嫌いの感覚が非常に微妙なところで判断されて揺れているんだなということが分かって、とても面白いと思いました。

**北澤：**僕はドローイングがとても面白いと思います。南画風、文人画風のセンスがありますね。

**福住：**小山さんの話で思ったのは、美術評論家といったって、意外に適当なもので、



作家にとっては、評論家に嫌われたとか好かれたというのは大きな問題なんでしょうけれども、実はあまり確固としたものじゃないんじゃないかという気がしていて。昔嫌いだったのに、今の作品がすごく良くなって見えるっていうのは、作品自体の変化も当然あるんでしょうけれども、周りや社会の方が変わっていくことも大きな問題としてあるし・・・コツコツと自分の好きなことをやっていったらいいのではないかなと思いました。

### 兼子紗都子「撹拌された記憶」

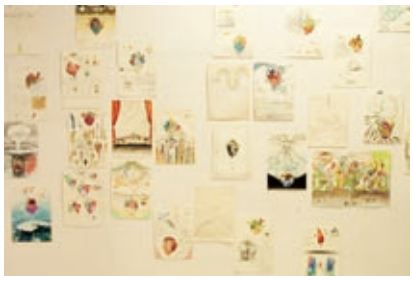
**杉田：**よく見ると電子コードで編まれていて、現実の社会というテーマにすべて当てはまっているかなと思って選びました。「社会に何か言及する」というと、「社会の問題について考えなきゃ」と考えがちですが、そんな大それたことをやらなくても、ちょっと素材を変えてみるだけで社会的なテーマを考えることができることを示している好例ではないかと。

**北澤：**「編む」って非常にシステマティックな行為なんですよね。数理的と言ってもいい。システム的だけれど、そこから非常に情動的な形が生まれてくる。同じことは、いろとりどりのコードについても言える。科学技術的なものと感覚的なものがまざりあっている。こういう絡まり合う二重性が、とてもおもしろい。しかも、これは完成していない。途中で止めている。止めているということがわかるような仕掛けになっている。理論的には、どこまでも永久に続けていけるということに気づかせるようになっている。ノン・フィニト（未完成）の意義が、この作者は分かっている。

**福住：**僕もこれは面白いと思いました。ほぼ無限に延々とやり続けることができるということで言えば、さらに長くなるとどうなっていくのかを見てみたい気がするし。あとこの円をもうちょっと大きくしたら、どういうふうに見えるのかなとも。この空間に対して、少し小さい気がするので、もうちょっと大きくしたらボリュームがもっと出て、よく映えるんじゃないかと思いました。すごく面白いと思います。

**北澤：**手芸的な技法を用いているわけですけど、手芸っていうのは造形のヒエラルキーでは工芸よりも下に置かれていて、美術として認められていないところがある。ところがアヴァンギャルド系現代美術によって、技法材料的にアナーキックな状況が出現したために、手芸という蔑まれてきた技法材料が表舞台で活躍する余地が生まれた。この作品の背景として、こういうことが指摘できるということを付け加えておきたいと思います。

### 大小島真木「What’s future」「The heart」



**杉田：**今回平面の作品で受賞した人はいないんですが、ちょっと触れてみたいと思います。今でも大学には平面を学ぶ専攻とカリキュラムがあって、一つのアートの表現形式として認められてはいるのですが、いざ外の展覧会を見ると実は割合的にものすごく少なくなっているんですね。それに呼応するような形で、なかなか平面の作家たちに光が当てられない問題もある。そんな中で、大小島さんはいろいろ苦心をして、油絵を描きつつ、それにまつわるドローイングとか、ストーリーを描き込んだような

自作品の解説をする大小島 真木さん

作品も作っているので、今回はそれらをすべて出品してもらいました。

**北澤：**ただタブローを出すだけじゃなくて、そこに至るプロセスであるとか、そこからの展開を見せている。つまり、自分の絵が出来てゆくプロセスを自分自身で理論化してみせる、そんな手法ですね。例えばデュシャンのグリーンボックスと大ガラスの関係みたいに、一挙に作品に収斂するんじゃなくて、そこに至るプロセスやシステム全体をひっくるめて作品として出してゆく。ひとつの作品が同時に、一種の理論的探究、たとえば絵画論であったり、美術論であったりする。レオナルド・ダ・ヴィンチの時代には科学と芸術、芸術と魔術が分離していなかったわけですが、ひょっとすると、現代のアートは、そういうところへ向けて大きく動き始めているのかもしれない。この作品も、そんな予感を多少なりともはらんでいるんじゃないかと、そんなふうに思います。

**福住：**今北澤さんがおっしゃった、タブローに至るまでのプロセスで出来上がった作品の方が、良く見えると僕は思ったんですね。本来ならば、こういう習作をノートに書き連ねたようなものをタブローとして完成させるというのが正式な手順なんでしょうけれども、今どこかでそれは転倒していて、そこに至るまでの過程でどういう手業を繰り返すとか、どういう色彩を選んでいくかというところが一番面白いと思うんですね。それは作家にとってだけでなく、見る側にとっても実は、タブローをガッチリ見て、絵と1対1で対峙して、そこで何か美的な経験を感じ取るみたいなことよりも、むしろその作家がどういうプロセスを経てこのタブローに至ったかを追体験することの方が面白い。そのことに見る側が実はもう気付き始めているのではないかと思います。

**杉田：**こうやって並べて見たときに、本来の見方からすると、タブローがあって、それにまつわるエスキースみたいなものがあるという感じで見られるんだけど、本当に心を開いて見た時には逆にも見えるというか、言葉は悪いですが、タブローが付属物に見えて、主客転倒しているようにも見えちゃうんですね。やっぱりそれは何か、先ほど福住さんは気付き始めているとおっしゃいましたが、見る側が、決まり切った枠組みの中でできる表現というものの限界に何となく気付き始めていて、そうじゃないものをもっと見たいという意欲があるのだと思うんですね。

**杉田：**最後に総合的な感想をお二人から聞いて終わりたいと思います。

**北澤：**この展覧会は想像していた以上に面白くて、楽しめました。展示も、とてもうまくいっていると思います。

ただ展示に関してちょっと思うのは、こういうオルタナティブ・スペースっていうのは、とにかく建物それ自体が非常に表現性を持っていて、作家たちは、自分の作品で、それと渡り合わなければならないわけですが、場合によっては負けてしまう。今回も正直に言えば、負けている作品が、ずいぶんあったと思います。たぶん、ホワイトキューブ慣れした発想の弱点が出てくるんだと思います。

ちょっと話は変わりますが、何年か前に、日本の住宅が「ウサギ小屋」と揶揄されたことがありました。たしかに西洋に比べて、アジアは住環境が貧しいんですね。つまり、住むためのハードウェアが概して貧困なんですが、ハードウェアが貧困だと、それに反比例して、ソフトウェアが豊かになる傾向があるように思います。具体例でいえば茶道なんか、その典型ですが、別の例でいえば、貧しい土地へ行けば行くほど、布の豊かさが目につく。布でハードの不備をカバーしているわけです。このことを踏まえていえば、ホワイトキューブではないところで展覧会をやる時は、布という材料は非常に有利だと思います。布というのは、この場合ソフトウェアのメタファーとして言っているわけですけど、作品というハードウェアではなくて、そこから何事かを引き起こしてゆくソフトウェアの活用が大切なのではないかと、そんなことを締め括り

北澤 憲昭教授

福住 廉氏

として指摘しておきたいと思います。

**福住：**僕は別に何の掛け値なしに、女子美という大学はすごく面白いなと思っていて。なぜかというと、国立新美術館でやっている東京五美術大学卒業・修了制作展を観ると、女子美のエリアだけ際立って変な雰囲気があって、これは一体何なんだろうと僕は常々疑問に思っていたんですね。ここに来れば何かわかるかなと思ったんですが、その正体を突き詰めることはもちろんできませんでしたが、やっぱり何かあるらしいということを再確認できたのはすごく面白かったです。

皆さんの中にはこれからも制作を続ける人もいると思います。僕は最近 BankART 1929から『今日の限界芸術』という本を出したのですが、その中で哲学者の鶴見俊輔さんという人と対談をしたんですね。彼が言っていたのは、「アンラーニング」の大切さということだったんです。アンラーニングっていうのは、ラーニングしてきたものをどんどん捨てて、覚えてきたものを忘れていく。鶴見さんはそれを耄碌という言葉で言い換えていましたが。近代芸術というのは、ラーニングばかりだったけれども、これからの芸術というのは、アンラーニングの方が大切なんじゃないかということを言っていて、それがすごく面白いなと思ったんですね。大学というところは、ラーニングを繰り返して、自分の技術なり表現の糧になるようなものを身に付けていく場所だと思うんですが、皆さんがそこから出て、その先どういう表現をしていくのかを考えた時に、もしかしたら重要になるのは、これまでラーニングしてきたことを捨てていく、どんどん忘れていくことなのではないか。それが、これまでのラーニングを繰り返してきた近代芸術とは違う芸術のあり方を暗示しているんじゃないかという気がしました。

**杉田：**福住さんは、2010年から授業を担当されますので、学生は声を掛けていろいろ話を聞かれるといいと思います。今日はどうもありがとうございました。

# Graduation

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

## 2008年度 卒業(修了)制作展　短期大学部

### ●平成20年度　卒業制作賞・修了制作賞・優秀作品賞　受賞者(短期大学部)

**〔卒業制作賞〕**

造形学科　美術コース
- (絵画)　山田　晴佳
- 梅山　智枝美
- (彫塑)　川里　寿枝

造形学科　デザインコース
- ・情報メディア系　浅川　千裕
- 久保田　りん
- 田中　美登利
- ・空間インターフェイス系　市川　加織
- ・クラフトデザイン系
- (陶芸・メタル)　三上　春菜
- (テキスタイル)　大井　萌
- (刺繍)　木内　沙織

**〔修了制作賞〕**

別　科　基礎造形専修　仲西　美耶

**〔優秀作品賞〕**

造形学科　美術コース
- (絵画)　川田　智美
- 竹沢　美香
- 徳田　舞香

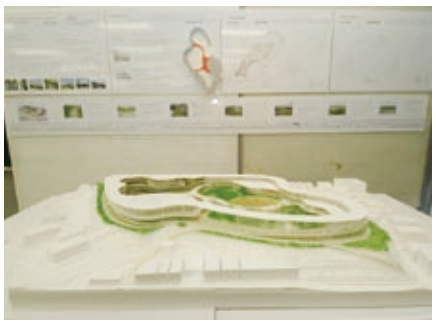
造形学科　デザインコース
- ・情報メディア系　長澤　麻美
- 藤村　咲子
- ・空間インターフェイス系　野口　摩耶
- 弥生　一葉

専 攻 科　造形専攻
- ・美術コース
- (絵画)　小澤　美穂
- (彫塑)　大木　加那
- ・デザインコース
- (情報メディア)　井上　千明
- 古橋　佳澄
- (空間インターフェイス)　坪井　麻希
- ・工芸デザインコース
- (陶芸・メタル)　松本　典子
- (テキスタイル)　小谷野　真衣
- 小倉　ひとえ
- (刺繍)　濱島　彬子

# Graduation

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

## 芸術学部・大学院



### ●平成20年度　卒業制作賞・卒業研究賞・修了制作賞・優秀作品賞・優秀研究賞　受賞者（芸術学部）

**〔卒業制作賞〕**

絵画学科　洋画専攻
大小島　真木
齊藤　慶子
原　汐莉

絵画学科　日本画専攻
長塚　祐子

工芸学科
小松　友美

立体アート学科
加藤　さやか

デザイン学科
愛甲　尚美
江並　由紀子
冨田　茶美
中田　貴和子

メディアアート学科
島原　沙織
照井　理美
松永　まり恵

ファッション造形学科
島田　彩子

**〔卒業研究賞〕**

芸術学科
辛　恩僖

**〔優秀作品賞〕**

絵画学科　洋画専攻
池田　華
榎本　浩子
片山　摩利恵
鶴田　珠美

絵画学科　日本画専攻
金尾　知美
千葉　祥子
金子　朋恵

工芸学科
中嶋　寿子

立体アート学科
市村　多眞美
金田　菜摘子

デザイン学科
垣内　碧
酒井　美菜子
鈴木　里奈
虎尾　麻梨
藤野　香澄
柳田　真弓
和賀　彩

メディアアート学科
小泉　麻有
小山　斐香
西村　愛美
矢野　祐貴子

ファッション造形学科
髙井　菜央
本田　絵里香

**〔優秀研究賞〕**

芸術学科
杉本　藍
奈良澤　瞳

# Graduation

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

## その他の卒業制作展

**大学院 美術研究科**

●美術研究科博士後期課程美術専攻造形表現研究領域
「女子美術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻修了制作作品展」
2月8日(日)～2月14日(土)　（ギャラリー青羅）

●美術研究科修士課程美術専攻洋画研究領域1年
「女子美術大学大学院美術研究科美術専攻洋画研究領域修士1年作品展」
1月25日(日)～1月31日(土)　（ギャラリー青羅）

●美術研究科修士課程美術専攻洋画研究領域2年
「女子美術大学大学院美術研究科美術専攻洋画研究領域修士2年作品展」
2月1日(日)～2月7日(土)　（ギャラリー青羅）

●美術研究科修士課程美術専攻日本画研究領域
「START　大学院日本画修了生有志展」
2月23日(月)～3月1日(日)　（東京銀座画廊）

●美術研究科修士課程美術専攻工芸（染・織）研究領域
2月19日(木)～2月24日(火)
（PROMO-ARTE Project Gallery）

●美術研究科修士課程デザイン専攻ファッション造形研究領域
「まんだらのこころ」
1月13日(火)～1月17日(土)　（成願寺）

**芸術学部**

●工芸学科
「女子美術大学芸術学部工芸学科染織陶硝子コース卒業制作展」
2月21日(土)～3月1日(日)　（BankART NYK）

●立体アート学科
「lady」
3月5日(木)～3月9日(月)　（山脇ギャラリー）

●デザイン学科ヴィジュアルデザインコース
2009年女子美術大学ヴィジュアルデザインコース有志　卒業制作「SEKI展」
3月20日(金)～3月24日(火)
（BankART 1929 NYKホール）

●デザイン学科ヴィジュアルデザインコース
「卒展」
3月6日(金)～3月8日(日)
（ラフォーレミュージアム原宿）

●デザイン学科プロダクトデザインコース
3月20日(金)～3月22日(日)　（東京デザインセンター）

●メディアアート学科
「Palette」
3月4日(水)～3月9日(月)　（横浜赤れんが倉庫）

●ファッション造形学科
「女子美術大学芸術学部ファッション造形学科有志2008年度卒業制作展」
2月7日(土)　Fashion Show：2月8日(日)
（BankART 1929 Yokohama）

**短期大学部 造形学科**

●造形学科デザインコースクラフトデザイン系　陶芸・メタルデザイン
「陶芸、金工、漆芸展」
2月15日(日)～2月21日(土)　（ギャラリー青羅）

●造形学科デザインコースクラフトデザイン系　テキスタイルデザイン
「卒業制作学外展」
2月23日(月)～3月1日(日)　（銀座アートホール）

**平成20年度　加藤成之記念賞**

〈大学院〉
美術研究科 修士課程 美術専攻 立体芸術領域　坂田　真弓

〈芸術学部〉
絵画学科 洋画専攻　原　汐莉
絵画学科 日本画専攻　井亀　玲子
工芸学科　大平　沙和
立体アート学科　谷田部　由美
デザイン学科　山本　夏美
メディアアート学科　照井　理美
ファッション造形学科　石上　理彩子
芸術学科　山崎　絵梨

〈短期大学部〉
造形学科　梅山　智枝美
専攻科　濱島　彬子
別科　山田　美郷

**平成20年度　福沢一郎賞**

大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 洋画領域　松沢　真紀
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 版画領域　金井　咲恵

**平成20年度　大久保婦久子賞**

大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 洋画領域　上原　雅美
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 日本画領域　井上　千穂
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 工芸領域　パトリシア　バグニエヴィスキ
大学院 美術研究科 修士課程 デザイン専攻 メディアアート造形領域　勝山　聡子
大学院 美術研究科 修士課程 デザイン専攻 ファッション造形領域　平沢　みゆき
大学院 美術研究科 修士課程 デザイン専攻 視覚造形領域　李　麒

**平成20年度　女子美美術館収蔵作品賞**

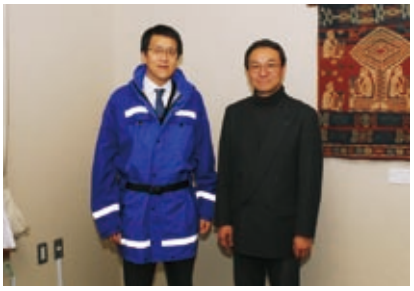
卒業（修了）制作で優秀な作品を女子美アートミュージアムの所蔵作品とします。

〈大学院〉
美術研究科 修士課程 美術専攻 工芸領域　廣川　桃子

〈芸術学部〉
絵画学科 洋画専攻　原　汐莉
絵画学科 日本画専攻　大串　絢美
工芸学科　山本　紗枝
立体アート学科　三科　友里
デザイン学科　小野　由佳
メディアアート学科　河本　祐華
ファッション造形学科　石上　理彩子

## Topics 1 プレファブコートAX（R:レスキューバージョン）贈呈式

2008年12月12日杉並キャンパスにおいてプレファブコートAXR（レスキュー型）の贈呈式が執り行われました。プレファブコートとはファッション造形学科教授の眞田岳彦氏が長年研究開発されてきた人とつながる衣服、心を豊かにする衣服を言います。そして、プレファブコートAXとは女子美術大学研究所の助成を受け、衣服や布が災害などで傷ついた人の心を包み、どのように緩和できるのか、ということを目的にデザインおよび制作してきたデザインプロダクトです。心理学者との対話や精神科医との勉強会、哲学者との意見交換や助言を元に、素材メーカーと組んで日本の先端繊維技術を使用して制作された布や、外衣料や医療衣などを縫製製造している企業などの協力を得てつくられました。このたびのプレファブコートAXR（レスキュー型）は、国立精神神経センターの金吉晴先生の医療チームへの救援活動支援として、衣服の社会貢献を目途に開発されました。金吉晴先生は日本を代表する精神科医であり、非常時の心的外傷後のストレス障害（PTSD）の治療における第一人者です。この医療チームは阪神淡路大震災や中越地震の折、過去にはペルーの日本人人質事件の折に真っ先に被災地に向い心的被害を受けた人々の救済に当たりました。被災地でより機能的で、着心地よく、視覚的にもデザイン性の優れたコートが完成し、お渡しする日を迎えました。金先生をお招きして着用状態を確認された眞田先生は、衣服の社会貢献の実現に一つの区切りと責任を果たされた安堵感が伺えました。



左:金 吉晴先生　左:眞田 岳彦先生

## Topics 2 本学卒業生 小説家 長野まゆみ先生 ご来校!

毎年恒例の学友会主催のアートゼミ。今回は1月17日に開催しました。お招きしたのは、小説家の長野まゆみ先生！

今回は長野先生のご希望で学生一人一人の顔が分かるようにと、限定40名での講演会となり、事前に申し込むという、普段とは一風変わったものになりました。

当日自由参加の講演会とは違い、学生一人一人が長野先生のファンという、とても幸せな空間だったのでは？

長野先生はとても優しい雰囲気の可愛らしい方で、お会いした途端に緊張がほぐれリラックスできました。書かれる文章そのままの雰囲気の方だったように思います。

装丁デザインについてのお話をしてくださり、著書の装画の原画や資料を見せていただいたり、とても貴重な体験ができました。

後半の質疑応答が盛り上がりを見せ、学生からの質問攻めとなってしまいましたが、その一つ一つに笑顔で丁寧に答えてくださいました。

女子美時代のお話や、自身の作品にまつわるお話や考え方など、ハッとさせられることもあり、笑いもありと、とても良い内容の講演会となりました。

（短期大学部学友会）

## Topics 3 えどがわ伝統工芸産学公プロジェクト

本プロジェクトは、産学公連携として有志学生が多摩美術大学・東京造形大学の学生とともに参加し、江戸川区在住の伝統工芸者とのコラボレーションによって製品開発、市場開拓やPR支援等を行うものです。伝統工芸者のもつ「わざ」に美大生の創造性をプラスすることで、既存商品との差別化を図り、新たな伝統工芸品を生み出しています。また、将来ものづくりを目指す学生たちにとって、熟練職人の仕事を直に学ぶ貴重な場にもなっています。

プロジェクトが始動した平成15年度からの3年間を礎に、平成18年度からはセカンドステージとして商品化を意識したアイデア創出に取り組んできた結果、より生活に密着した作品提案が多くなってきています。さらに今年度は取組自体が「2008年度グッドデザイン賞」を受賞したことで、このプロジェクトが先駆的、実験的なデザイン活動として社会的・客観的に高く評価されたと言えます。

プロジェクトは今年度も2度の選考会を経て、本学からは8名の学生作品が製品化されました。教員賞にはデザイン学科3年佐藤奈津子さんの「組子コースター（ＯＲＩＯＮ）」が選ばれています。

組子コースター（ORION）

# Report 1 就職フェア2009レポート

## 2658名の学生が参加!

3年生の就職活動が本格化している中、2月3日から7日までの5日間、相模原キャンパスにて「就職フェア2009」を開催しました。夏に開催した「キャリアカーニバル」は美術やデザインを生かす仕事にはどのようなものがあるのかという、進路決定への第一歩として実施したイベントだったのに対し、本イベントは、企業の人事担当者からの会社説明からはじまり、実際に行われる採用試験の内容や対策、本学卒業生からのアドバイスなど、より具体的、実践的な内容のプログラムを実施しました。

今回の「就職フェア2009」には3年生はもちろん、1年生や2年生の参加も目立ち、5日間で延べ2658名の女子美生が参加し、就職に対しての意識の高さが伺えました。参加企業は、本学学生が多く志望する企業をお呼びしたこともあり、学生たちも志望企業の説明担当の方々の話に真剣に耳を傾け、活発に質問なども行っていました。

＜参加企業（業種）＞
広告代理店、テレビ局、映像制作、Webデザイン、文具、玩具、ゲーム、キャラクター、化粧品、服飾、ジュエリー、バッグ、靴、テキスタイル、商業施設設計施工など合計22社の企業説明会を開催しました。

## 多彩なイベントプログラム

なお企業説明会だけでなく、就職活動をスタートしている学生が今、まさに必要とするスキルをアップするための講座も併せて実施しました。また、作品ファイル講評会の開催にあわせて特設コーナーを設置し、過去に内定した先輩たちが後輩たちのために寄贈していってくれた、作品ファイルの展示も行いました。

## 参加学生のアンケートより

◆とても有意義な時間を過ごすことができました。貴重な会社内での取り組みや仕事内容、必要とされている人材の条件など勉強になるお話を聞くことができ、参加できてよかったと思います。履歴書講座は本当に受けて良かったです（芸術学部メディアアート学科2年）
■大変面白かったです（短期大学部2年）
●50分のサイクルが丁度よく、いくつも話をききくことができてよかったです。内容も会社のこと以外にも就職活動自体についてやファイルのことが聞けてためになりました（芸術学部メディアアート学科3年）
▲いろんなタイプの会社があっておもしろい。インハウスデザイナーの企業の話がもっと聞きたい（芸術学部デザイン学科1年）
■様々な企業の方が来て話しをしてくださったので自分の中の世界が広がるとても良い機会だったと思います（芸術学部デザイン学科1年）
●とても充実していました。各会社を比べてみるとその会社の雰囲気が何となくわかりました（芸術学部絵画学科洋画専攻3年）
▲卒業生が来てアドバイスをくださったのが良かったです（芸術学部メディアアート学科3年）
■とてもフランクな感じでよかったです（芸術学部デザイン学科3年）
●履歴書についてや作品ファイルなど、詳しいことが知れてよかった。1年にも参加しやすかったのでとても勉強になりました（芸術学部メディアアート学科1年）
▲少ない日数でたくさんの企業説明会が聞けるのでとても充実した時間が過ごせました。また履歴書講座や作品ファイル講評会なども参加して勉強になりました（芸術学部芸術学科2年）
■細かい所まで話をしてくれて、他で行く企業フェアと違って短縮せず説明してくれたのでよかった（芸術学部デザイン学科1年）
●会社名だけでは興味のないところでも、話を聞いてみて興味を持つことができました（芸術学部デザイン学科3年）
▲作品ファイル講評会がとても勉強になりました。各学科1名ずつくらい講評・プレゼンがあると良いなと思いました（芸術学部立体アート学科3年）
■今回の就職フェアですが、夏に行われたキャリアカーニバルのように、各企業の選考方法など説明内容がとても充実していて良かったです（芸術学部芸術学科3年）

## 学生アドバイスコーナー

5日目の2月7日、今年度、内定を獲得した芸術学部4年生5名による、学生アドバイスコーナーを開設しました。現在就職活動中の3年生たちは、個別に思い思いの不安や悩みを相談するとともに、憧れの企業に内定した先輩たちの生の体験談・アドバイスに熱心に耳を傾けていました。

＜参加した学生の内定先企業＞サンリオ、白鳳（SWIMMER）、スタージュエリー、コナミ、博展

## マナー講座

5日目の2月7日、夏のキャリアカーニバルで開催し好評だったJALアカデミー講師による「マナー講座」を実践編として開催しました。今回は、前回の講座を発展させた内容に加え、実際の面接試験を想定した模擬面接も実施しました。参加学生は全員、採用試験本番さながらのリクルートスーツで講座に参加し、講師の厳しい指導下で真剣に取り組んでいました。

## 履歴書書き方講座

4日目の2月6日、キャリア支援センターのスタッフによる「履歴書書き方講座」を実施しました。この講座は、昨年秋に実施した講座の復習に加え、実際にスタッフが履歴書を添削していて気づく、見落としやすいポイントなどについて説明を行いました。会場の224番教室はほぼ満席で、未だ「履歴書」や「エントリーシート」作成への苦手意識・不安を持つ学生が非常に多いことが伺えました。

## 作品ファイル講評会

**就職フェア2009最終日の2月7日、本学非常勤講師であり、株式会社コーセーのデザイナーである原田アンリ氏による作品ファイル講評会が行われました。会場となった相模原キャンパス224教室には、熱心にメモを取り、原田氏の話に聞き入る学生で溢れました。**

**講評会は、あらかじめ選出された芸術学部の3年生4名が作品ファイルのプレゼンテーションを行い、その後、原田氏が講評を行う形で進められました。作品ファイルのテクニックはもちろん、厳しい採用試験にどう勝ち残るか、第一線で活躍する原田氏ならではの指摘に、参加者が大きくうなずく姿が印象的でした。**

### 「ポートフォリオ=自分」

まず、ポートフォリオのあらゆる小さなファクターも自分を表現するものとしてしっかり利用すること。作品のサイズ、日付、素材といった情報を伝える文字ですら、色は墨でいいのか。しっかりと文字組みできているか。ひとつひとつ突き詰めて考えてください。数百あるポートフォリオの中から、最終面接に残るのは5、6人。最後に残る1人、2人になるには、どこまで細かい部分に神経を使えているか、すごくわずかな差です。「絶対これが最高だ」というところまでとことん考えてみる。そこまで考えられたら、プレゼンテーションにも説得力が出るはずです。

ポートフォリオは「おもてなし」です。見せるものではなく、見ていただくもの。見る人にとって見やすいかという気遣いを常に忘れないようにしてください。特に、作品の実物をファイルの中に埋め込む場合、ケアを忘れないように。埋め込んだものが脱落している。触った時に手が汚れる。重ねたときに他のファイルが傷つく。どんなに作品が良くても、そんなセンスをもったデザイナーを誰も採用しようとは思いません。そして、常にデザイナーに求められるのは品性と清潔感。不潔なもの、下品なものを消費者が買わないように、会社もそういうセンスのデザイナーを採用しません。

ポートフォリオは、イコール自分です。自分と切り離して格好良く作ろうとしてはだめ。その時点で違うものができてしまう。「このファイル、私っぽい？」常にそういう感覚でつくってください。

### 「目にみえることは言わなくていい」

そして最後にひとつ、覚えておいてほしいのは「プレゼンテーションは作品の説明をすることではない」ということ。作品の話をするのは、自分自身を語る手段であって、目的ではありません。見ればわかる作品の話を聞きたいがために、わざわざ人を呼び出してプレゼンテーションをさせるのではありません。目に見えることは言わなくていい。形にできない自分の思い、胸の内にあるものを、プレゼンテーションの数分間で言葉にしてください。

**最終日にふさわしい、熱気ある講評会とともに就職フェア2009は幕を閉じました。**

## Report 2 ハスクバーナ賞・マデイラ賞 受賞者紹介

### ハスクバーナ賞

短期大学部　福山 理花子

この作品は、生命のはじまりという強い力と、生きていくことの力強さをテーマとして制作しました。モチーフの形態は、生命のはじまりである「卵」を選択しました。無数の細胞と血液は、絡まりながら束ねられた無数の糸で表現したいと思いました。水溶性の布に、何本もの線をマシーンステッチしたあとに、布を水で溶かして糸のみで形成したパーツを作りました。いくつもの複雑な細胞の集合は、パーツを重ねて組み合わせることで、表現しました。組み合わせにより、糸の表情が変るので、組み立て直しながら、イメージを膨らませました。これからも、自分の内面に問いかけながら、細胞と血液をテーマに制作を継続したいと思います。

ハスクバーナ賞について

スウェーデンのハスクバーナ社は 300年以上の伝統をもつ製造メーカーです。1689年に国立工場として創立し、現在はチェーンソウから幅広い家庭用機器を製造しています。1872年よりミシンの製造を始め 1979年にはハスクバーナ社として初のコンピュータミシンを開発し、世界の刺繍作家やマシーンキルト作家に愛用されています。2001年度からバイキング ソーイング マシーンズ ジャパン社より、そして、2006年度からは株式会社ジューキ ハスクバーナ事業部より、授業にハスクバーナミシンを使用している女子美術大学修士課程美術専攻工芸（刺繍）・短期大学部造形学科デザインコース クラフトデザイン系刺繍を対象として卒業制作および修了制作において最優秀作品を制作し、将来専門分野で活躍が期待される学生に賞が授与されています。

### マデイラ賞 受賞

短期大学部　大谷 友梨絵

この作品を制作するときに大切にしたのは、糸と布などのやさしい感触の素材を用いて、おもわず「さわってみたい」「ふれてみたい」そんな気持ちになってしまう絵本を、制作することでした。絹・麻・綿・レーヨンの刺繍糸で、絹・麻・綿・ナイロン素材の布に、日本刺繍・フリーハンドステッチ・デジタルミシンステッチ・フリーモーションミシンステッチの技法で、人物・室内装飾・建物・森をステッチしました。私にとって、物語の展開に合わせて、それぞれのパーツに特色を持たせて、刺繍針で絵本を制作することは、とても楽しい時間でした。

マデイラ賞について

ドイツのマデイラ社は工業用、作家・一般向けの刺繍用糸（手刺繍・マシーン刺繍 ）の製造・販売を行っています。アメリカ・イギリス・日本などに支社があります。業務のほかに、刺繍やテキスタイル、ファッションを学ぶ学生たちをサポートすることも重視し、毎年イギリスで開催されるマデイラ・ショーは、展示部門に大学や専門学校の学生作品を招待展示しています。2000年のマデイラ・ショーには刺繍コースの学生作品が展示され好評でした。本賞は、クラフトデザイン系刺繍の卒業・修了制作のうち、優秀と認められた作品に 2001年度より授与されています。

福山 理花子「0117」

大谷 友梨絵「ヘンゼルとグレーテル」

Essay

## 第9回パリ賞受賞者
# 保科晶子さんエッセイ

**パリにある国際芸術都市に毎年受賞者を研究員として派遣する100周年記念大村文子基金による「女子美パリ賞」。第9回受賞者で1年間パリに滞在していた保科晶子さんが現地で感じたことを寄稿してくださいました。**

*ごろんに触ると　指先と手が感じるんだ*
*空間の中で　土が回り　先へと進む*
*まるで体が急に軽くなったみたいだ*
*土と一緒に旅立つように*
*ごろんの重さも*
*頭の中の思いも*
*軽くなっていくみたいだ*
*そしたら飛び立つことができるんだろう*
*ごろんと一緒に*
*手の先っちょに　ごろんをのせながら*
*Jean=Luc Parant*

現代美術家・詩人のジャン＝リュック・パランさんが個展に詩を寄せてくださいました。東京の古本市でパランさんの作品集を手に取ったのが出会い、球状の陶を無数に並べたインスタレーションは、私の作品「ごろんごろんごろん」によく似て、またその徹底ぶりに衝撃を受け、いつか会いに行こうと。その後、フランス旅行で偶然個展を2度目撃、今回の滞在中、ようやくご本人に会い、ノルマンディのアトリエを訪ねました。様々な媒体で活動するパランさんを始め、パリで見た現代美術家たちの陶の扱いは、素材を遠くから見てその特徴をダイナミックに語る、興味深いものでした。

ぐるぐるまきワークショップは、粘土をコミュニケーションツールとして社会と関わっていく、特長あるワークショップを今後展開したいと思う貴重な経験でした。セーブル国立陶磁美術館では、伊藤公象先生、知香先生の展覧会助手をさせて頂いたことが縁となり、イシュー・レ・モリノウ市では、日仏文化交流150周年行事として、㈱パジコ様に材料提供を頂き実現しました。

土、水、火という元素素材でできた陶が歩き出したら面白そうだとスタートした「ごろんの旅」。徐々にごろんは変化し、大きくなり、粘土が手に負えなくなる感覚の面白さ、粘土・陶の人格性、生命性に注目し始めました。西洋ではオブジェはオブジェ、「旅するやきもの」は時にユーモラス、または意味不明、賛否両論の中、物には魂が宿っているという考えが、日本人の私に自然に根付いていることに気付きました。同時に一つの価値感や視点に注目したとき、国や文化の枠を超えた共通理解も見出せると、国際芸術都市で世界中のアーティストと交流したことから感じています。また、ここでの体験と陶のプロセスを強く結びつけたDes funérailles（お葬式）が作れたことは大きな喜びで、陶の可能性をさらに追求したいと思わせてくれました。

さて、もうすぐ1年の旅が終わります。ずっと前から続いていたし、これからも続いていく、そんな想いです。どんなときも、素直に、シンプルに、今を感じることが一番だと過ごしてきました。ここでの縁を丁寧に繋げ、太い綱にしたいと思います。すばらしい活動の機会をくださった女子美術大学関係の皆様に大変感謝しております。ありがとうございました。

新作窯中

FIACポスター前で

イシューワークショップ

女子美のアトリエで

**保科晶子**
1996年女子美術大学美術専攻陶造形領域修了
2008年パリ賞受賞、現在パリ市国際芸術都市に滞在中
2009年3／4-14同ギャラリーにて個展「Goron en voyage / Des funérailles」
同年6月～9月第15回シャトールー市国際現代陶芸ビエンナーレ出品予定
ホームページ　www.akikohoshina.com

NEWS 1

# 100周年記念 大村文子基金 平成20年度 女子美美術奨励賞

女子美美術奨励賞（付属高校・中学校生対象）は本学付属生徒の美術活動を奨励する賞です。右記の通り、本年度の「付属学校生」の受賞者が決定しました。

**高校生受賞者**
餅田　裕稀
女子美術大学付属高等学校　3年

**中学生受賞者**
中野　展
女子美術大学付属中学校　3年

**◇100周年記念大村文子基金募集について**

同窓生・大学院在学生を対象に制作・研究活動の奨励等を目的とした「女子美パリ賞」「女子美 制作・研究奨励賞」を毎年募集しています。今年度の募集受付期間は、平成21年6月1日㈪～6月30日㈫です。
〔お問い合わせ先〕教育学生支援センター
TEL：03-5340-4507
E-mail：es-ecp-j@joshibi.ac.jp

詳細については、本学ウェブサイトをご覧ください。
URL：http://www.joshibi.ac.jp/campuslife/incentive/foundation.html

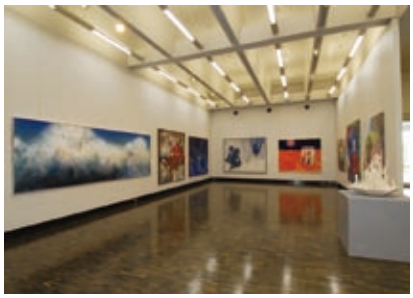
# JAM・女子美アートミュージアム展覧会情報

## JAM展覧会報告

### 平成20年度女子美術大学大学院修了制作作品展

平成21年3月に大学院を修了する学生の修了制作を約50点展示しました。

（3月9日〜20日）



## JAM展覧会予告

### CaptionCaption

芸術学科4年生プロデュースによる展覧会です。作品鑑賞の場である展覧会では、作品とともに、タイトルや作者の情報を記載したキャプション（作品解説板）が掲示されます。本展は、古今東西約4000点の作品のキャプション展示を通して「作品」と「キャプション」の関係、そして「実体」と「命名の歴史」について考えようとするものです。

（4月8日〜5月6日）

### やっぱり…ファッション造形。　アートからデザインまで

女子美同窓会による企画展です。近年のファッション造形学科卒業生の作品と歴史資料の展示を通して、女子美におけるファッション造形のこれまでの歩みを振り返るとともに、今を大切に育てることにより未来へと繋ぐファッション造形の今後を展望します。

（5月13日〜6月14日）

### on the earth project　つくる,こわす,生きる.ダンボールタウンで考えた.

小学生と女子美生のコラボレーションによる社会参加型のプロジェクトです。昨秋のワークショップで制作されたダンボールハウス、制作過程の記録映像、写真の展示を通して、ワークショップの意味を再確認するとともに、小さなアートの活動が社会にメッセージを発信する手段のひとつであることを伝えます。

（6月26日〜8月2日）

## 女子美ガレリアニケ展覧会報告

女子美ガレリアニケとは：若手女性作家を中心に、女性をテーマとして作家や作品などを取り上げるだけでなく、教員をはじめ芸術学部・短期大学部、同窓生から応募した企画を中心に、展覧会、パフォーマンス、ワークショップ、トークショーなどを開催します。

### はっぴぃ♥ぱんつ

フェルトアイドル「はっぴぃ♥ぱんつ」櫻井彩（芸術学部メディアアート学科卒）による展覧会。

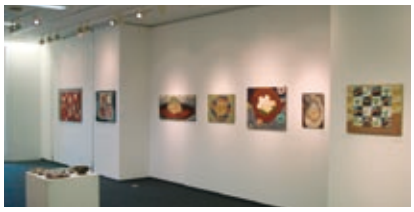
企画：羽太謙一（芸術学部メディアアート学科教授）

（1月6日〜1月24日）

### What' s eat?

cook担当の竹中紘子、art担当の川村千波（芸術学部絵画学科日本画専攻卒）の2人組「eat」による展覧会。企画：伊勢克也（短期大学部造形学科デザインコース教授）

（1月27日〜2月14日）



### Party of War

杉田敦ゼミを中心とするグループMMS（minna maji sensoh=みんな、マジ戦争？）による、戦争をテーマとした展覧会。

企画：杉田敦（芸術学部基礎教養系准教授）

（2月17日〜2月27日）

### flat fish　takuma kagi

企画：杉田敦（芸術学部基礎教養系准教授）

（3月3日〜3月15日）

### 女子美アート・セミナー　サテライト講座作品展

サテライト講座（ボタニカルアート、日本画、クロッキー／デッサン）受講生の作品展。企画：オープンカレッジセンター

（3月17日〜4月4日）

## 女子美ガレリアニケ展覧会予告

### 松川ビジョンの世界とその継承者たち

故・松川烝二のデザイン思想や教授法を継承する「松川ビジョン研究会」のメンバー7名による展示。（4月6日〜4月18日）

企画：松本ヒロ子（女子美術大学付属高等学校・中学校　美術科教諭）

# NEWS・2 立体アートの学生作品が北里大学のパブリックコレクションへ

芸術学部立体アート学科４年生熊崎彩さんの卒業制作作品「この速度（スピード）で」が、平成21年3月末に北里大学獣医学部の十和田キャンパス（青森県・十和田市）内に設置されることになりました。きっかけは獣医学部の先生方が本学相模原キャンパスで昨年10月に開催された女子美祭を見学した時に、制作途中のこの作品をみて、「ぜひ獣医学部のキャンパスに展示したい。」と思ったことから。熊崎さんは「多くの方にみて頂けるので嬉しいです。元気さや前向きな気持ちを感じて頂けたら幸いです。」と語ってくれました。熊崎さんは卒業後、立体アート学科で培った技能をもとに、株式会社本田技術研究所で車のデザインモデラーとして活躍します。

「この速度(スピード)で」
2008年 樟・欅・アクリル絵 120×190×60cm
女子美術大学芸術学部立体アート学科４年　熊崎彩 作

## Topics ④ 桑島十和子さん（卒業生）日本アカデミー賞 最優秀美術賞 受賞!

本学卒業生で美術監督として活躍する桑島十和子さん（短期大学部造形科絵画教室卒業）が第32回日本アカデミー賞において最優秀美術賞を受賞されました。今回桑島さんが美術監督を務められた受賞作品は映画「パコと魔法の絵本」です。桑島さんは映画「嫌われ松子の一生」でも優秀美術賞を受賞されています。桑島さんに今回の受賞を受けてのコメントをいただきました。

※「パコと魔法の絵本」DVD（通常版・特別版）&Blu-rayが絶賛発売中です。DVDの特別版には、桑島さんがデザインされた CGキャラのメイキングなども入っています。

**桑島さんからのコメント**

受賞に関してのコメントととのことですが、私の今までの運が良かっただけのことなんです。トントン拍子でここまで来てしまい、本人も驚いている今日このごろです。大きな賞をいただき、私のまだほんのちょっとの人生を初めて振り返る機会に巡り会いました。これでよかったのか？と。何かの巡り合わせでこのような時期を迎えていると思い、これからのあとほんのちょっとの私の毎日を楽しんで行きたいと思っています。これを読んでくださった皆様の毎日も素敵でありますように。

©2008「パコと魔法の絵本」製作委員会

## Topics ⑤ 毎日広告デザイン賞第一部 奨励賞受賞!

若手クリエイターの登竜門である新聞広告賞「毎日広告デザイン賞」において、長岡真子さん（芸術学部メディアアート学科3年）が奨励賞を受賞しました。

長岡さんは、メディアアート学科川村貞知准教授自主企画の新聞広告賞Projectに参加、過去入賞作品の傾向と対策を研究してのアイディア出しから、データ作成、出力、パネル貼り、出品までをトータルに学びながら制作を進めました。

「写真は地元金沢で3日間張り込んで撮影。かなり不審がられました（笑）」と長岡さん。「自分の作品がプロの方々に評価される機会はめったにないのでとてもうれしいです。この結果を自信にして、これからも色々参加していきたいです。」

・入賞作品展：4/22～5/4
　松屋銀座7Fデザインギャラリー

（写真右上）
長岡真子さんと受賞作品
小学館「小学一年生」30段カラー
コピー「はじめてが始まった。そこからみんな一年生。」
AD, D, P: 長岡真子（芸術学部メディアアート学科3年）
C: 長田聖美（青山学院大学4年）

（写真右下）
作品一部拡大

## Topics ⑥ 神奈川県立公園キャラクター・ロゴマーク

メディアアート学科3年生の13名からなるプロジェクトチームは、財団法人神奈川県公園協会の依頼により神奈川県立公園のVIプランやイベント企画を提案、キャラクター及びロゴマークが採用されることとなりました。今後は、ぬいぐるみ等のグッズや、着ぐるみ等に展開して行く予定です。

（芸術学部メディアアート学科教授　ヤマザキミノリ、同准教授　川村貞知）

【キャラクター・ロゴマーク】
「公園」を「交園（=Communication Parks）」→「coen」と定義。
「人と人との交わり、人と自然との交わり。」をコンセプトに、「人と人」または「人と自然」を表した青と緑の2つの円の重なりで構成。公園での出会いや交流によって新しい何かが「めばえ」ます。

プレゼンではかぶり物をかぶって寸劇と替歌でアピール！

## Topics ⑦ 公募展受賞者紹介

**第8回 佐藤太清賞公募美術展**
**［日本画の部］入選**
丸山裕希子（芸術学部絵画学科日本画専攻3年）

**WONDER SEEDS 2009　入選**
中藤理恵（大学院美術研究科美術専攻洋画領域1年）

**「武田山のお殿様」キャラクター採用**
祇園地区（広島県広島市）「地域資源∞全国展開プロジェクト」のイメージキャラクターとして「武田山のお殿様」キャラクターデザインの公募において、田尾容子さん（芸術学部メディアアート学科2年）のデザインが採用されました。

「武田山のお殿様」

発　　行　学校法人 女子美術大学
　　〒166-8538 東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集　企画部 広報入試課
制作・印刷　株式會社 日相印刷
監　　修　原田　松野
発 行 日　2009年3月31日